

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

川西裕也

【所属】(助成決定時)

東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門

【研究題目】

朝鮮時代の古文書の伝来論的研究—古文書の廃棄・再利用を主として—

【研究の目的】(400字程度)

近年、朝鮮時代(14~19世紀)の古文書に関わる研究は活発に行われており、その蓄積は相当量に達している。しかし、これまで、古文書の伝来に関する本格的な研究はほとんど行われてこなかった。朝鮮時代において、文書がどのように生産・伝達・保存・廃棄・再利用されており、それがどのような意図・理念のもとに行われていたのかという問題にとりくむことは、現在我々が利用している古文書群の形成過程の解明という、重要な史料学的課題に密接につながる。こうした基礎的な作業を抜きにして、古文書の適切な利用や厳密な史料批判は困難である。

上記の問題意識のもと、本研究では、「朝鮮時代の古文書の伝来論的研究」という課題に本格的にとりくむことにした。しかし、先行研究がいちじるしく不足している現状では、その総合的・包括的な研究を進めることは不可能である。そこで、伝来論的研究の礎を築くための第一歩として、「当時、古文書がいかに廃棄・再利用されたのか」という問題を中心課題にすえ、その実態の解明を目指した。

【研究の内容・方法】(800字程度)

朝鮮時代当時において、各組織が文書をどのように保管・管理していたのかを伝えてくれる、詳細な目録や帳簿はこれまで確認されていない。朝鮮時代の古文書の保管や廃棄の実態を明瞭に物語る史料は非常に少ないのである。そこで、本研究では、正史・日記・謄録等の各種文献史料から、古文書の保管と廃棄に関わる断片的記事を抽出して整理・分析を加えた。分析の対象とした主な史料は下記のとおりである。

『朝鮮王朝実録』、『承政院日記』、李文健『黙齋日記』、柳希春『眉巖日記』、許穆『記言別集』、南鶴鳴『晦隱集』、鄭載崙『公私見聞』、権相一『清台日記』、黄胤錫『頤齋乱藁』、尹愷『無名子集文稿』、趙秀三『秋齋集』、李圭景『五洲衍文長箋散稿』。

また、朝鮮後期(17~19世紀)の史料として、「重記」や「伝掌記」・「伝与記」という、物品保管目録・物品引継目録がある。これらの史料は、官庁や郷村組織・書院・寺院等における文書の保管・廃棄を考察する上で手がかりとなるものである。本研究では、韓国の研究機関や大学図書館が所蔵する「重記」・「伝掌記」・「伝与記」の調査・分析を行った。対象とした史料はおおよそ次のとおりである。

「全羅道重記」(ソウル大学校韓国学研究院奎章閣所蔵)、「庫次知各項紙物謄書等等伝掌冊」(同)、「紙物下記冊」(同)、「順天郡各掌重記」(同)、「軍色重記」(同)、「上下重記冊」(同)、「古文書」(韓国学中央研究院蔵書閣所蔵)、「公文書類引継目録」(同)、「伝掌記」(同)、「各庫物庫」(韓国国立中央図書館所蔵)、「李等内重記」(同)、「光緒十四年六月日江西各庫重記冊」(同)。

【結論・考察】(400字程度)

楮で作られた朝鮮の紙は非常に丈夫なため、防寒用として休紙(反故紙)が建築物の壁や窓に貼られたり、衣服や靴・笠の材料として転用されたりしていた。また、休紙を漉き返して還紙(再生紙)を造ることもしばしば行われていた。朝鮮時代において、紙は貴重品であったため、多くの場合、休紙は再利用されたのである。ただ、場合によっては、反故となった文書が焼却されることもあった。文書焼却の目的は、後世に残すべきでない判断された文書や、悪用される可能性のある失効した権利・財産関連文書の存在を完全に消滅させることにあった。

日本や西欧に比べ、朝鮮の古文書は残存数が非常に少ない。その理由として、戦乱による焼失や近現代における大量の廃棄等が挙げられるが、前近代朝鮮において紙が不足していたことも、文書消失の主要因の一つと考えられる。朝鮮時代には、紙の生産量が低迷しており、また休紙の再利用が活発であったため、文書の廃棄・再利用が促進され、結果、多数の古文書が消失してしまったものと推測される。